

障がい者スポーツ普及振興事業支援金事業の実施状況について

1 事業名 次世代につなぐ障がい者スポーツの理解推進モデル事業

2 事業実施期間

平成 28 年 10 月 1 日 から 平成 29 年 2 月 28 日まで

3 事業の概要

(1) 事業目的

障がい児・者が学校や地域におけるスポーツ活動に参加できる機会は十分ではなく、継続的にスポーツ活動を実施できる環境は整っていない状況にある（文科省, 2016）。そのため、学校や地域における障がい者スポーツの環境整備と拠点づくり、障がい者スポーツの活動や普及を支える人材育成の取り組みが重要な課題となっている。本事業は、県内 2 カ所のモデル地区（松本市および長野市）において次世代を担う小・中学生と大学生を対象に、障がい者スポーツの体験と学習、スポーツを通して障がい者との交流を図るための取り組みを行い、障がい者スポーツの理解推進に貢献することを目的に行われた。

(2) 事業内容

①協力校、協力団体、特別講師

本事業の趣旨に賛同して今回の取り組みに参加協力いただいた学校（以下、協力校）は、信州大学教育学部附属松本小学校、同附属松本中学校、長野県松本盲学校、および長野市吉田小学校の計 4 校であった。また、実行委員会メンバーが所属する信州大学教育学部（特別支援教育専攻学生、障がい者スポーツ関連授業の受講生；松本市及び長野市）と清泉女学院短期大学（幼児教育科；長野市）の学生が実習授業の一環、または企画運営スタッフとして参加した。

上記の小・中学生と大学生を対象に障がい者スポーツの体験プログラムを実施するにあたり、松本盲学校テニス部 [視覚障害]、長野市内で活動するフロアホッケーチーム長野ゴシ隊 Jr.（長野県フロアホッケー連盟所属）[知的障害]、信州大学車イスバスケットボール部セローズ [運動障害]、長野アップル水泳クラブ [運動・知的障害] の各団体の協力を得た。また、小林稔氏（松本盲学校教諭）、奥原明男氏（車イスバスケットボール元全日本代表チームメンバー）、箱山愛香氏（リオ・オリンピック大会シンクロナイズドスイミング全日本代表チームメンバー）の 3 氏を特別講師として招聘し、障害および障がい者スポーツに関する学習会、講演会を開催した。

②活動内容【資料 1】

<長野地区プログラム>

資料 1 上段に長野地区で実施した体験・交流プログラムの活動概要を示した。吉田小学校 4 年生（1 学級、計 30 名）、信州大学教育学部の学生（1,2 年の計 41 名）が 9-11 月を通して計 6 回、フロアホッケーの体験と練習を行った。長野ゴシ隊 Jr. チームとの練習試合も 2 回行い経験豊富で技術力の高い知的障害アスリートとの交流を楽しんだ。11 月に開催された第 15 回 NAGANO 障害者シンクロナイズドスイミング発表会（主催・清泉女学院短大小林研究室）では同短大の学生 7 名が企画運営スタッフとして参加した。発表会当日は一般参加者向け体験プログラム、箱山氏による模範演技と講演会が行われ、学生たちはプールサイドから応援と鑑賞を楽しんだ。

<松本地区プログラム>

資料 1 下段に松本地区で実施した体験・交流プログラムの活動概要を示した。10 月から翌年 1 月まで

の間に、附属松本中の1,2年生（計160名）と信州大学学生（計75名）が松本盲学校でサウンドテーブルテニスとフロアバレーの体験プログラムに継続して参加した。12月に附属松本中で行われた松本盲学校小林教諭（全盲）による学習・講演会には3年生（計80名）が参加した。車イスバスケットボールの体験プログラム（12月、1月）には附属松本中の2年生（計40名）と附属松本小の3年生（計40名）が参加し、信州大学セローズの学生アスリートとの交流を楽しんだ。中学生プログラムでは特別講師・奥原氏の技術指導と講演会が行われた。また、11月に開催された中信地区フロアホッケー大会（松本歯科大学体育館）に信州大学教育学部学生1名が長野ゴシ隊 Jr.チームの一員として2試合に出場した。

③公開シンポジウム【資料2,3】

2月上旬、本事業の成果報告会を兼ねた公開シンポジウム「わたしたちが体験し学んだこと～障がい者スポーツの魅力と可能性～」を信州大学松本キャンパスで開催した。前半は事業概要説明と活動報告（小島）に続き、「障がい者スポーツを通しての学びと交流」と題したパネルディスカッション（司会進行・加藤、コーディネータ・宮地と小林）が行われ、各校の参加児童・生徒の代表8名、大学生3名、サポート教員3名がパネリストとして登壇した。休憩時間にはサブ会場において活動記録写真と小・中学生の感想メッセージのパネル展示が行われた。後半は「スポーツをきっかけとした体験・交流に参画して」と題して教員3名と学校関係者によるコメント発表、フロア参加者を交えた質疑・応答と意見交換が行われた。当日は、実行委員、発表者、パネリストの計18名、会場運営スタッフの大学生計28名、そして一般市民約25名、合計70名以上の参加者があった。資料2に広報用ポスター、資料3に活動報告で上映した各プログラムのスライドショー写真を示した。

（3）事業成果と今後の課題【資料4,5】

資料4（-1,2,3）に、体験プログラムその他に参加した附属松本小と同松本中の児童・生徒から寄せられた感想メッセージを再録した。子どもたちの言葉や表現から、彼らが今回の活動を通して障がい者スポーツの体験・交流を経験することにより、「障がい」や障がい児・者の「文化」を知り、学び、理解を深めたことが強く感じ取れる。遠方のため公開シンポジウムに出席できなかった吉田小の児童は当日の会場へビデオメッセージを届けてくれた。その映像とメッセージからも同様の経験と学びがあったことがうかがえる。

本事業の実行委員会メンバーである加藤は、障がい者スポーツの体験、障がい者とのスポーツによる交流を経験した信州大学学部生の活動レポートとアンケート調査の記述内容を分析し、彼らの障害理解がどのようなものだったか、自身の障害理解が気づきや変化を他者と共有し合うことでどのように深まったのか、という観点で検討を行った。結果の一部は3月に信州大学で開催された長野体育学会第52回大会で発表された（資料5）。障がい児・者の教育や福祉に関心のある大学生にとっては、様々な障がい児・者の活動に触れることが自身の進路選択を具体的に考えるためのきっかけとなったはずである。

このように、小・中学生や大学生が今回の事業を通して障がい児・者との様々な交流と支援の経験を持ったことは、次世代の地域共生を推進する支援者育成につながり、将来の共生社会の実現につながることを期待できる。また、本事業で企画した講演会や公開シンポジウムは、特別支援学校や支援学級の教員、地域のスポーツ指導者等へ障がい者スポーツの種目、指導方法等を紹介するための良い機会となった。小・中学生の意見発表やパネル展示は事業に直接参加できなかった方々にも障がいスポーツの魅力を十分に伝えることができたと思われる。

最後に、今後の障がい者スポーツの一層の理解推進と普及振興を図る上で課題となる点をいくつか指摘する。第1に、今回のモデル事業は協力校を信州大学の附属学校2校と長野市内の小学校1校に限定して行われたため、他地域の学校や複数の学校間での交流や学習の機会をつくることができなかった。次年度以降も同様の事業が継続されるならば、多くの地域・学校へ取り組みが拡大され

ること、今回の協力校が理解推進のモデル校として一定の先導的役割を果たすことが課題となる。第2に、大学生の大半は委員会メンバーが担当する授業や地域活動の一環として本事業に参加した。今後は、大学のカリキュラムと連動した障がい者スポーツの実習授業、障がい者関連の地域交流活動が体系的プログラムとして学生に提供され、実践されることが必要だと思われる。第3に、実行委員会メンバーである私たち大学教員の責務でもあるが、本事業の成果を広く公開し他府県や外部識者の意見・評価を収集すること、それを踏まえて今後の取り組みに向けた具体的な方策を検討することが求められよう。

+++++

<資料リスト>

- #1. 主な活動実績
- #2. 公開シンポジウム広報用ポスター
- #3. 公開シンポジウム PPT スライド集
- #4-1. 感想メッセージ（車椅子バスケットボール体験会／奥原氏講演会）
- #4-2. 感想メッセージ（松本盲学校 学校見学／体験学習）
- #4-3. 感想メッセージ（松本盲学校小林先生講演会）
- #5. 研究発表抄録（長野体育学会第52回大会, H29/3/4, 信州大学）

【資料】 主な活動実績

プログラム	種目	日程	会場	協力校・団体、講師	参加学生等	概要
<長野地区>						
1.大学生・フロアホッケー体験会・交流試合	フロアホッケー	9月24日・11月(2回)	信大教育附属 特別支援学校体育館	長野ゴシ隊Jr.	信大特支1年(21名) 信大特支2年(20名)	フロアホッケーを初めて経験する大学生が長野ゴシ隊Jr.選抜チームとの交流を兼ねて練習試合を行った。
2.小学生・フロアホッケー体験会	フロアホッケー	10・11月(3回)	吉田小学校体育館 信大教育附属 特別支援学校体育館	吉田小学校4年生、長野ゴシ隊Jr.	信大特支2年	吉田小4年生が担任の近藤先生、大学生、長野ゴシ隊Jr.メンバーら経験者に教わりながら、初めてのフロアホッケーを楽しむことができた。
3.障がい者シンクロ体験会	障がい者シンクロ	11月19日	長野県サンアップル	長野アップル水泳クラブ 箱山愛香氏(長野シンクロクラブ・リオ五輪銅メダリスト)	清泉女学院短期大学生(7名)	シンクロナイズドスイミングの発表会・ソロ競技会、箱山選手の模範演技・講演会を通して、障害者スポーツとしての水中競技を紹介・体験した。
<松本地区>						
1.大学生・盲学校部活動交流	サウンドテーブルテニス (スルーネットピンポン)	10・11月(5回)	松本盲学校体育館	松本盲学校(教員、生徒約15名)	信大1年(約30名) 信大教育1年(25名)	大学生が松本盲学校卓球部と交流し視覚障がい者卓球の体験を行った。また、校舎見学を行い、視覚障がい者のバリアフリー環境を体験した。
2.中信地区フロアホッケー大会参加	フロアホッケー	11月27日	松本歯科大学体育館	長野ゴシ隊Jr.	信大教育4年(1名)	長野県の地区大会の試合に長野ゴシ隊Jr.チームの一員として大学生が参加した。
3.中学生・視覚障害スポーツ交流	サウンドテーブルテニス (スルーネットピンポン) フロアバレー	12月(4回)	松本盲学校体育館	松本盲学校(教員4名) 附属松本中1,2年(約160名)	信大特支1年(20名)	中学生が盲学校を訪問し、校舎見学および視覚障がい者スポーツを体験した。大学生は体験活動のサポートを行った。
4.中学生・視覚障害者講演会 「視覚障害者の生活とスポーツ」	スポーツ各種紹介	12月6日	信大教育附属 松本中体育館	小林稔氏 (松本盲学校教諭) 附属松本中3年(約80名)		中学生を対象に、全盲者である小林氏による講演を行った。小林氏が行っている視覚障がい者スキーや、学校で児童生徒が行うスポーツ、また日常生活について話された。
5.中学生・車椅子バスケット 講演・体験会	車椅子バスケット	12月16日	信州大学体育館	奥原明男氏 (長野WBC・北京パラリンピックヘッドコーチ) 附属松本中2C(約40名)	信大車椅子バスケット部(4名)	中学生を対象に、奥原氏による講演と、車椅子バスケットボールの体験会を行った。奥原氏自身の障がいとアスリート生活について話された。体験会では、大学生アスリートが中学生の車椅子体験および競技体験のサポートを行った。
6.小学生・車椅子バスケット体験会	車椅子バスケット	1月15日	信大教育附属 松本小体育館	信大車椅子バスケット部(セローズ) 附属松本小(約40名)	信大車椅子バスケット部(4名)	小学生を対象に、大学生アスリートチーム(2016大学選手権優勝チーム)による体験会を行った。体験会の前に、健常者が障がい者スポーツに参加する意義に関する講話と、競技の説明を行った。

公開シンポジウム

わたしたちが体験し学んだこと ～障がい者スポーツの魅力と可能性～

このシンポジウムの主役は、モデル事業の一環として県内 2 地区で行われた障がい者スポーツ（サウンドテーブルテニス、車いすバスケットボール、フロアホッケー、シンクロナイズドスイミングなど）の体験会 / 講演会に参加した若者たちです。小・中学生と大学生の参加者をパネリストに迎え、前半は彼らがそれぞれの体験を通して理解したこと学んだことについて発表します。後半は会場の皆様とともに、障がい者スポーツの魅力と可能性、これからの特別支援教育や共生社会のあり方などについて自由に意見交換を行います。当日は会場内に活動記録の写真と小中学生のメッセージをパネル展示します。どうぞ気軽にご来場ください。参加費無料。



日時：2017年2月4日(土)

13:30 - 15:30 〈受付開始 13:00〉

会場：信州大学松本キャンパス

共通教育棟 北校舎 3F

定員：70名（先着順。事前予約は必要ありません）

対象：障がい者スポーツ関係者、教員、学生、一般市民

パネリスト：長野市立吉田小学校 / 信州大学教育学部附属松本小学校 / 信州大学教育学部附属松本中学校
長野県松本盲学校 / 信州大学教育学部特別支援教育コース
以上の各学校の子どもたちと大学生

司会

加藤 彩乃

(信州大学全学教育機構助教)

コーディネーター

宮地 弘一郎

(信州大学教育学部准教授)

小林 敏枝

(清泉女学院短期大学幼児教育科教授)

主催：

次世代につなぐ障害者スポーツの理解推進モデル事業
実行委員会（代表 信州大学教育学部教授 小島哲也）

問い合わせ先：

次世代モデル事業シンポジウム事務局

〒380-8544 長野市西長野 6 信州大学教育学部 宮地研究室

Tel/Fax 026-238-4201 Eメール miyaji@shinshu-u.ac.jp



松本城/松本駅



【長野県障がい者スポーツ協会助成事業補助金】
次世代につなぐ障がい者スポーツの
理解推進モデル事業

公開シンポジウム

**わたしたちが
体験し
学んだこと**

～障がい者スポーツの
魅力と可能性～

1/40

【目的と内容】

○本事業は、地域における障がい者スポーツの体験・交流活動を通して障がい者スポーツの理解を推進することを目的とする。

○県内2地区において次世代を担う小・中学生と大学生を対象にした障がい者スポーツの体験交流、公開シンポジウムの取り組みを行う。

○事業成果を広く発信することにより、障がい者スポーツのより一層の普及振興に貢献する。

2/40

【松本プログラム】

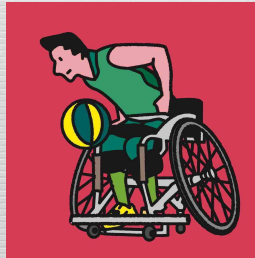
(対象競技) 車いすバスケットボール / サウンド
テーブルテニス / フロアバレーボール
(協力校・団体) 附属松本小学校 / 附属松本中学校 /
松本盲学校 / 信大教育学部 / 信大セローズ
(特別講師) 小林 / 奥原明男氏

【長野プログラム】

(対象競技) フロアホッケー / シンクロナイズド
スイミング
(協力校・団体) 吉田小学校 / 信大教育学部 / 清泉女
学院短期大学 / 長野ゴシ隊Jr. / 長野アップル水泳
クラブ
(特別講師) 箱山愛香氏

3/40

車イスバスケットボール *Wheel Chair Basket Ball*



4/40



松本小

5/40



松本小

6/40



松本小

7/40



松本小

8/40



松本小

【資料#3-1】 公開シンポジウムPPT









1～2 事業の目的・内容

3～13 車イスバスケットボール

#14～24 フロアバレーボール／サウンドテーブルテニス

#25～34 フロアホッケー

#35～40 シンクロナイズドスイミング

【資料】 車椅子バスケットボール体験会／奥原氏講演会 感想（附属松本中 2C）

奥原さんの話を聞いて思ったことは、友だちの大切さや常に目標を持ち続けることの重要性を学んだ。車いすバスケットは車いすの操作がとても難しく大変だったが、とても楽しくプレーをすることができて、とても良いスポーツだと思った。
そもそも車いすに乗ったのが初めてだったので、操作が難しかった。でも慣れていくと面白く、もっとやってみたいと思った。シュートを打つ、ドリブル、タックルは普通のバスケットとは感覚が違ってかなり難しかった。また、奥原さんのお話の中で、「自分で立てた目標は自力で精一杯やっていく」という言葉があり、自分も何があってもあきらめずに頑張っていきたいと思えた。
車いすバスケットを体験して、予想したよりも難しくなく、楽しめた。でも上半身の力だけでシュートを打つのは大変だった。奥原さんは障害を乗り越え、友だちに助けられ生きることができたとおっしゃっていた。私も友だちを大切に、自分の健康に感謝したい。
車いすバスケットを体験して、とても楽しかったです。障害のある人となない人が、同じスポーツを同じようにプレーできて楽しめるってとてもいいなと思いました。もしまた機会があれば、体験してみたいと思いました。
バスケットのゴールがすごく上であって、シュートするのが大変でした。車いすバスケットの選手の方や好きな方も、始めは普通のバスケットとの違いや難しさを感じたのだらうなと思いました。落ちているボールを拾うのもとても大変だったので、車いすの方が物を落として困っている時は、拾ってあげたいなと思いました。
車いすバスケットを初めてみたときは「簡単な？」と思ったけど、奥原先生のお話や、実際の体験を通して、とても大変なスポーツだと分かりました。体験を通して、障害のある人もない人もみんなが同じく関われるすごいスポーツだと思いました。また、スポーツだけでなく相手のことを考えて行動することの大切さが感じられました。
映像を見ただけでは、車いすの操作が面倒で、ぶつかったり危なっかしいと思っていたけど、実際に乗って動いてみると、力を入れやすいし楽しく感じた。ゴールが高くて入れるのが難しかった。もし何かがあって車いすの生活になったとしたら、奥原さんのように立ち直ることは難しいと思う。
車椅子を操作するのは思っていたよりも簡単でしたが、車いすを操作しながらボールをとったりシュートをするのはとても難しかったです。また、奥原さんのお話を聞いたりして、奥原さんにとって車いすバスケットはとても大切なものなんだなと思いました。何かを失っても自分で生きがいを感じるものがあれば、人生楽しそうだなと感じました。
すごくためになる講演でした。怪我をしてから大きな影響になっていたのは“友だち”です。一つ一つの言葉が良くも悪くも心に積もって行って、これからのプラスにもマイナスにもなっていく。だからこそ、友だちの存在はすごく大事だと、この講演で本当に改めて思いました。そして、バスケットの楽しさを久しぶりに味わって、あきらめずにリハビリ頑張ろう、と素直に思いました。今日は、本当にありがとうございました。
車椅子バスケットを体験して、思ったより力を入れなくても進んでいったし、ボールが高く上がらないからカットが簡単にできました。そして何よりも奥原先生が2Cのバスケットの様子をみて楽しそうに笑っている姿が印象的でした。障害があってもなくても、バスケットを好きな人がいて、バスケットを楽しんでいる人がいて、そんなバスケットを通してまた一つつながりが増えたことがうれしかったです。
（怪我のため）車いすバスケットを体験できなかったけれど、普通のバスケットと車いすバスケットの違いを学ぶことができた。もし自分がやったら、ボールを持ったまま車いすを動かしたりするのは絶対難しいし、やっぱり見てて難しそうだった。先生は16歳の時に事故にあって、私たちは今14歳で、

なんだか複雑な思いになった。その中で、思いっきり楽しめるのは、すごいなあと思った。
上半身だけを使うので難しかったが、それ以上に楽しかった。足の不自由な人でも楽しめるスポーツは、手足の自由な人でも楽しめると思う。体験談を聞く中で、普段の生活の苦労が多くあることを知った。自由な身体が当たり前だと思わず、大切にしたい。
車いすバスケットを体験してみて、思っていたよりも難しかったし、シュートも全然届かなくて、並大抵の努力ではうまくないなと思いました。でも、想像以上に楽しくて、車いすを使うのが特に楽しかったです。こんな体験はめったにできないので感謝したいなと思ったし、ぜひまたやりたいなと思いました。障害のある人、ない人がスポーツを通して楽しく、繋がれるのがいいなと思いました。
車いすバスケットについてだけでなく、それ以上の、人生について考えさせられることまで学んだような気がします。車いす生活になってもう死にたいとまで考えていたところを、叱れる友だちがいるだなんて。とても衝撃的だったし、とても感動したし、そんな友だちを私は人生の中でもつことができるだろうかと思いました。そして車いすバスケットというスポーツについて。まず、信大体育館へ行って驚いたのが、私たちと同じ健常者の方がプレーしているということ。でも自分でやってみると難しいけど、とても楽しくて、障害のある方だけのスポーツではないんだなということを感じることができました。そして、こうして様々なスポーツが健常者だけでなく障害のある方でもできるようにアレンジされているのはとてもいいと思ったし、そういうスポーツで生きる道を見つけられたという人も、奥原さんのようにたくさんいると思うから、どんどん増えていってほしいと思いました。
車いすバスケットを生まれて初めて経験してみて、思ったよりうまく車いすを動かしたが、それに加えボールを使うという、二つの動作を同時にやるみたいなことが難しかった。奥原先生が言っていたように、友だちと協力したり、助け合うということは、どのような立場にあっても必要だと改めて思った。体験を通し、人生に必要なことを多く見付けられる、いい体験学習だった。

【資料】 松本盲学校 学校見学・体験学習の感想（附属松本中 1,2 年生）

目が見えないって大変だけど、そんな中でも前を向いて頑張っている人がいるんだなと思いました。それに、目の見えにくい人のために、本当にたくさんの工夫がされていて、これからの未来もそんな工夫が進んでいって、誰もが過ごしやすい世界ができればいいと思います。
体験してみて、普段私たちが当たり前にしている物を見るということができないということの意味が分かった気がしました。いつも真っ暗の中にいる人はとても不安だということも分かった気がしました。そんな人を守り、安心して暮らせる環境をつくってサポートする、そういう校舎の造りと先生方に、とても感動しました。今の世の中は、目が不自由な方が安心して快適に過ごせる環境ではないので、不自由な方も安心して暮らせる社会を創っていくことが大切だと思いました。
盲学校にはいろんな工夫があり、「なるほど」と思うこともたくさんありました。今日は生徒さんには会わなかったけれど、きっと楽しく生活しているんだなと思いました。お話では、「声をかけてあげて」とおっしゃっていて、なかなかできないけれど、私は電車を使っているから勇気を出してみたいと感じました。バレーでも「声」で伝えることがとても大事でした。いつもの学校では分からない良い経験でした。
盲学校は、私にとって遠い存在でしたが、今日見学したことによって、視覚障がいの方への接し方とかが分かりました。校内の至る所に工夫がしてあり、「これなら安心だな」と思いました。特に「廊下には何も置かない」「ドアが開いたら音が鳴る仕組み」は小さいことだけど大事なことです。これから街中で困っている方を見たら、助けようと思います。
「僕たちが目の見えない人たちの過ごし方を知ったって」と最初思っていましたが、体験・見学するうちに、「今自分にできることを探そう」と思えるようになりました。盲学校はたくさんの工夫がされていてすごいと思いました。こうやって知っておくというのも大切なんだと感じました。
人は色々な手段を使って生きていますと感じました。一番心に響いたのは「心眼無限」という言葉です。目は見えなくても「心の眼」では、どんなことでも無限に見える、私はその言葉を見たとき、当たり前のように、全く当たり前ではなかった、そんなことを感じました。
障がいをもった人は、私にとってあまり身近な存在ではなかったけれど、体験や見学などを通して、世の中には色々な人がいること、自分なんかよりも、もっと大変な思いをし、試練に立ち向かっている人がいること、そして、それらの人々は、私たちの協力でもっと楽になり、その重い荷物を少しでも持ってあげられることを学びました。何も見えない状態は、とても危険で不安だろうから、その人たちが私たちと変わらない生活を送り、盲目が一つの個性になる時代を目指して、一人一人が相手を思いやる必要性をとて感じさせられました。
見学してみて、校内の生徒への配慮が細かいところまでされていたことがわかりました。特に、食堂にあったランドマークは見やすいように白黒を反転させていたり、小さい子でも分かるように、絵で表されていたりして驚きました。また、スルーネットピンポンは、健常者と障がい者が関係なく遊べる楽しいゲームでもっと広まっていくべきだと思いました。
普段の生活では感じられないものを、実際に目の見えない方とかかわって感じました。私の生活の中では、健常者は普通に暮らせる環境だと思いますが、盲目の方や聞こえない方が生活しやすい環境にはなっていないと思います。ちょっとした工夫をみんなが心がければ、みんなが暮らしやすい環境になると思います。
今日の夜、白杖をついた方がいました。赤信号の大通りを渡りそうになったり、人にぶつかってしまったりしていました。そんなとき、まわりの人たちは「危ないですよ」と声をかけたり、点字プロ

ックの上を歩かせてあげたりと助けていました。大通りだとうるさくて信号の音もよくわかりません。助けてあげることは大事だなと思いました。困っていたり危なかったりしたら声をかけたいです。
障がいをもった人はどういうことをするのが難しいのかなど、もっと知るべきだと思います。スルーネットピンポンは誰でもすごく楽しくできたので、関わりにくい人とでも気軽に関われるスポーツだと思いました。
全盲や弱視など、いろんな人がいるのだなあということを学ぶことができた。私がもし足が不自由になったり目が不自由になったりしても生活ができるように支えてくれる人や一緒にいてくれる人たちがいるので安心だと感じられた。私は、一緒にいてくれる人、支えてくれる人になりたい。
実際に暗くなるメガネをかけたら、歩くだけでも怖かったし、卓球するのは楽しかったけれど、ずっと暗かったらとても怖いと思う。暗い中で社会に出ている人たちは、きっととても怖いし不安だと思うから、困っていたりしたら、びっくりしないように声をかけていきたい。
盲学校を見学して、私にはまだまだ知らないことがたくさんあるなと思いました。若い人、お年寄りの人など関係なく、障がいをもった人に会ったら、その場の状況に応じて考えて行動していきたいと思います。また、障がいがあってもなくても誰にでも優しく接することのできる人になりたいです。
小さなところに様々な工夫がたくさんあるなと思いました。とても小さなことでも、それにより大切な命が守られたり、健常者と同じ生活ができるんだなと感じました。4つの願いを胸に刻み、手助けができるようにしたと思いました。
見学をしてみて、自分の中の視覚障がい者の方への抵抗が薄くなりました。以前は、駅などで困っている障がい者の方を見ると、声をかけようと思っても抵抗があり、なかなか声をかけることができませんでした。しかし、今日スルーネットピンポンをやってみたり、お話を聞いてみたりして、以前より困っている障がい者の方に声をかけられそうな気持ちになりました。大切なことが学べました。
今まであまり知らなかった盲学校や目や耳が不自由な人についてわかって、自分自身そういった学校や人に対する気持ちというものに変化があったと思う。今まで正直少し偏見をもってしまっていた部分があり、目や耳が不自由な人を見かけても、手助けしようとか困っていないかなと考える場面は少なかった。しかし、今回こうして目や耳が不自由であっても、スポーツ、読書など、同じように楽しんでいるということや、その人たちなりに一生懸命頑張ろうとしていることがよく分かり、今後はそういった方々の役に立つことが少しでもできたらと思うようになった。私じゃ頼りない部分もあるだろうが、これからは手を差しのべられるようになりたいと思った。
盲学校と聞くと、普通の学校とは全く別というイメージだったけど、見た目は思ったより違いが少なかった。しかし、説明を聞いてみると、私たちだったらあまり気にしないようなところに様々な工夫がされており、小さな違いでも目が見えない人たちにとっては、大きな違いになるんだなと感じた。社会全体として見ても、まだ障がい者と呼ばれる人たちの理解が足りていないように思えて、そういうところから意識していけばいいと思う。
私は目が見えない世界って、私が目をつむったときみたいな感じかなってずっと思っていた。でも、あのメガネを付けたとき、光が一筋たりともなくて怖かった。すごく真っ暗でびっくりした。本当はもっと真っ暗なのかもしれない。目が見える幸せを感じた。盲学校では目が見える人と見えない人が支え合っている。私は点字ブロックを見たことがある。でもそれがある場所はとても少ない。私の通学路には一つもないと思う。どうしたらお互いが暮らしやすい世界になるのだろう。
目が見えていなくても、そのことを自分の不利な点ではなく、有利な点として取っている目が見えない方々の姿がすごいと思った。そういう姿を見られただけでも、ここへ来た価値は充分あった。目が見えない方々の問題とだけでなく、自分たちの問題として捉えることがとても大切だと感じた。

【資料】 松本盲学校小林先生講演会・感想 （附属松本中3年生）

登下校中など、白杖を使って歩く人を見かけることがありましたが、その人が少し困っているように見えても、「逆に迷惑かな」「勇気が出ないな」と思って、声をかけることができませんでした。ですが、小林先生が「困っている人を見つけたら声をかけてほしい」また、IT機器や音声ガイドや商品、街のバリアフリー化が進んだとしても、「一番安心できるのは人の支えです」と語っていらしたの聴いて、少し声をかける勇気が出てきました。形だけのバリアフリーは本質的な違いをうまないと思います。世の中には、小林先生のように目が不自由な方もいれば、耳、身体が不自由な人、お年寄りや赤ちゃん、言葉の不自由な外国人など、様々な立場の方がいます。全員が平等に学べ、語り合え、身体を動かせる「心のバリアフリー」の世界を実現させるために、自分ができることを考えていきたいです。

正直、講演会の前までは、私は障がい者と健常者の間に少しだけ超えがたい壁を感じていました。なぜなら、障がい者と健常者では生活の仕方というものが違うし、どうやって触れ合っていけばよいのかと思っていたからです。しかし、講演会を終えた今、私の気持ちは変わりました。1番強く感じたことは、障がい者だけ特別というわけではなく、障がい者も健常者も皆が同じこと、ものを体感し、共有することができるということです。決して、差別したりするのではなく、お互いに歩み寄って理解し合いながら生きていくことがとても大切だと思いました。障がい者、健常者の間で固い壁を作るのではなく、同じ一人の人間として、互いにあたたかい心を持ち、分かち合っていく。全ての人が心地よく過ごせるよう、そんな世界をこれから作っていければいいなと今感じています。

以前、盲導犬を連れて買い物をしている人を見たことがあります。今回、先生の話を含めて、目が悪い人でも、見える人と同じようなスポーツや生活ができるように、たくさんの工夫がされていると思いました。同じように目が悪くならないと、先生の立場を理解することはできませんが、話している先生の姿はとても輝いて見えました。紹介してくださったスポーツは、とてもおもしろそうだと感じました。また、最後に話してくださった「全力でやりきる」ということを常に意識していきたいと思います。

今まで私の知らなかったことをたくさん知ることができました。目が不自由というのはあまり分からなくて、深く考えようとも思ってもいなかったけど、講演を聴いて、困っていそうなときは声をかけることや、点字ブロックの上に物を置かないなどのことを聞いて、もっと日々意識しなきゃいけないことがたくさんあると思いました。また、目が不自由でもたくさんのスポーツができるんだなと思いました。目が不自由だと、スポーツは上手くできないものだと思っていたけれど、サポートする人がつくことによって、とてもやりやすくなるんだなと思いました。

「健常者」「障がい者」「目の悪い人」…こういう心のバリアが自分の中にあるかもしれないと改めて感じたし、もっと目の不自由な人などと話してみたい、もっと知りたいと強く思った。「どんなバリアフリーよりも、人の支えが一番」と聞き、不自由な人を積極的に支え、よりよい松本市、長野県にしていきたい。

私の家の近くでも、目の見えない方をよく見かけます。その人は白杖を使って歩いています。私はその人を見ると、「きっとこの道を歩くのが初めてだったとき、不安だったんだろうな」と思いました。それでも、現在はまるで目が見えているかのように真っ直ぐ歩いている姿を見かけると、「やっぱり諦めてはいけない。繰り返すのみなんだな」と感じます。今日の講演では「失敗したから諦めるのではなく、失敗をしたからもう一度チャレンジしてみる」ということを学びました。どんなに辛くても、その後はきっとよいことがたくさん待っているんだと思えば、何度でもいろんなことにチャレンジできると思います。これからは、そんなことを考えながら、たくさんのことにチャレンジしていきたいと思います。

白杖を持っても、不安に感じているのだなという本音も知ることができました。それから、クロスカントリースキーやマラソンなどのスポーツも、こんなに盛んに行われていて、視力のハンデを抱えていても、前向きに明るく過ごしている姿を映像で見て、私も元気をもらいました。

以前、視覚障がい者について、よく知らず、どう接すればいいのか、わかりませんでした。そういった部分でも僕はシャイだったのかもしれませんが、でも、小林先生のお話を聞いて、視覚障がい者の人た

ちは、強く生きていてすごいなと、尊敬の気持ちが生まれました。そして、より身近に感じました。これから困っている人を見かけたら、優しく声をかけて助けたいです。僕は、小林先生が教えてくれた「行動を起こすこと」をこれから大切に、もっと強く生きて、人の役に立ちたいです。
「目が見えない」ということは想像するだけなら容易いことだと思います。しかし、自分が実際に目を閉じて歩いてみれば、その難しさや不便さというのは、とても大きいものと分かります。小林先生のお話にあったような「不幸」ではなく「不便」ととらえるという考え方は、自分の不利な点を前向きに考えているようで、すごいことだと思うと同時に、私の生活態度や考え方にも活かしていけるのではないかと、そう思いました。『点字』は、私の母も昔習っていて、その当時は「なぜ目が見えるのに点字を学ぶの?」と思っていました。しかし、街で杖をついている方を見たり、先生のお話を聞いて、目の見える私たちも理解する必要があるのではないかと、思いました。
小林先生のお話は、普段私たちでは感じ取ることができないとても新鮮なものでした。日常をどうやって過ごしているかや、どんなスポーツをしているのかなど、全く知らないことばかりで興味をひくものでいっぱいでした。実は先日、下校中に、白杖を持った方とすれ違いました。全盲の方なのか、点字ブロックや周りの木や置物を確認しながら、ゆっくりと歩いていらっしやいました。その時、一緒に帰っていた〇君は、「無理に助けなくてもいいから、道をあけてやれ」と私に言いました。こんな場合は、声をかけた方がいいのでしょうか?それとも、〇君のようにした方がいいのでしょうか?私はどちらにも優しさがあると思います。
努力することの大切さがわかりました。ある日突然障がいをもってしまった人は、その生活に慣れるまで、トレーニングを続けなければならないことがわかりました。トレーニングの継続によって、元気な生活を送れるようになった人の姿に勇気付けられました。自分は、目標を立てても続かないことが多かったので、今日の話を忘れないようにし、継続することを毎日大切にしていきたいです。
小林先生は、視力を失ってから、自分にできることを探し、自分の夢、目標をもっていたので、今こうして生き生きとしているのだと思いました。もし、僕が同じ立場だったら、やる気を失い、外に出ることに対して億劫になり、行動しなかったと思います。なので、行動できた小林先生を心から尊敬します。先生を見習い、何か壁にぶつかったら、諦めずにやってみることを大切にしたいと思いました。
目が見えないということにも個人差があることや、生活をサポートする様々な機械があること等、盲目の方に関して新しく知ったことがたくさんありました。晴眼者の方でも多少の危険があるスキー等の競技も、工夫によって、全欧の方でも楽しめるということには驚きました。小林先生の明るい話し方と面白い話で、視覚異常に対するイメージが大きく変わりました。僕は毎日バスを利用して登下校しています。その際、白杖を使われている方を見かけることがあるのですが、これまでは声をかけられずにいました。日本は、点字ブロック等の設備が整っている方だとは思いますが、盲目の方にとっては、手をひいて案内した方が安心されるということなので、これからはできるだけ声をかけたいと思います。
今回一番興味をひかれたのは、スポーツをする視覚障がい者のお話です。野球をするそれらの人の顔は、晴眼者の野球選手のように、緊張していたり、笑顔でくしゃくしゃになっていたり。この人たちは本当に心の底から「野球」を楽しんでいるんだなと感じました。晴眼者と視覚障がい者の違いは、「目が見えるか見えないか」だけであり、それ以外は基本的にないということを再認識していかなければならないと思いました。野球もバレーも一緒にやることのできる。これは、これからの自分たちが障がいのある方と交流するときに、重要になってくる考えの一つだと思います。
目の見えない人は正直不幸だと思っていたけど、今日お話を聞いて、見えなくても工夫すれば、普通のことだとわかりました。また、目の不自由な人が困っているときは、話しかけるだけでも安心してもらえるようなので、見かけたら話しかけるだけでもすること大切さを知りました。そして、目の不自由な人だけでなく、困っている人を見たら助けたいと思います。
「不便だが不幸ではない」この言葉が心に残っている。何事も前向きに考えていくことで「成功」や「楽しみ」が見えてくるかもしれない。そんな心をもつことができることはすごいと思った。小林先生にお礼を伝えたい。

障害者スポーツ体験や障害者との交流による障害理解の深まり —他者との気づきや学びの共有を通じて—

加藤彩乃（信州大学）

キーワード：障害理解，障害者スポーツ体験，交流，気づきの共有

1. 研究の背景

障害者スポーツの体験や障害者との交流（以下、スポーツ・交流体験）が障害に対するイメージや認識に何らかの影響を与えることが報告されている。しかし、体験の前後で障害に対する認識を問うアンケート結果がポジティブに変化することが障害理解ではなく、また、「理解する側-理解される側」、「支援する側-支援される側」といった上下関係が残ったままの理解を促すことが本当の障害理解や、共生社会に向けた認識態度のあり方ではない。多様性の存在を知り、その中で個人個人がどのように感じ、判断し、行動していくかが重要な鍵となってくる。この様な理解を促すために、スポーツ・交流体験の効果測定として、スポーツ・交流体験前後の体験者自身の変化のみに注目するのではなく、他者との関わりの中で理解や認識、気づきの内容がどう変化するか、または変化する可能性があるのかを知ることが重要であると考えた。

そこで本研究では、障害者スポーツの体験や障害者とのスポーツを通した交流体験により、1) 体験者の障害理解がどのようなものを示し、2) 気づきや変化を他者と共有し合うことでどのように障害理解が深まるのかについて明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

2-1. 対象と活動場面

対象は、A大学で特別支援に関する学習を継続的にを行っている大学生24名で、主にフロアバレーボールとサウンドテーブルテニスの体験を行った。（表参照）各種目の指導は、障害のある選手や、障害のある教員、障害のない指導者が行い、種目によっては、障害のある選手と競技を行った。

また、スポーツ・交流体験のまとめとして、種目説明や活動の様子、体験を通して感じたことなどを報告する機会を設けた。なお、活動報告会は、同時期に車椅子バスケットボールやフロアホッケー、フロアバレーボールなどの体験をした近隣の小学校および中学校の代表児童生徒と合同で行い、年齢や体験種目を越えた気づきや学びについて共有した。

表. 体験種目と種目概要

種目	種目概要	対象者の体験
フロアホッケー	＜知的障害者の陸上ホッケー＞ スペシャルオリンピックス特有の種目。 穴の空いたフェルト製のバックをスティックで運び相手ゴールをねらう	○
サウンドテーブルテニス	＜視覚障害者の卓球＞ ラバーの貼っていないラケットと鉄球の入ったボールを用いて、ネットと床の間を転がしてプレーする。	○
車椅子バスケットボール	＜肢体不自由者のバスケットボール＞ 専用の車椅子を用いて行うバスケットボール。使用するボールサイズやリングの高さは一般と同様。障害の程度によって個人に持ち点があることや、ダブルドリブルの反則がないことが特徴的。	一部対象者と小・中学生
フロアバレーボール	＜視覚障害者のバレーボール＞ ネットと床の間を通過させボールを打ち返す。ボールに鈴などの音が鳴る物が入っていない。 6人制で行われ、前衛の3名はアイシールド（目隠し）を付けている。	中学生

2-2. データの収集および分析方法

報告会終了時、対象者に対して調査の趣旨およびデータの扱い等について口頭で説明し、同意を得た。

調査項目については、「スポーツ・交流体験を通した体験者自身の変化」「スポーツ・交流体験を通して感じたことを他者にどのように伝えるか」「他者の気づきや学びの報告から印象に残ったもの」などのテーマを設定し、それぞれに対する考えについて回答をワードファイルで提出することを求めた。

回収されたデータについて、意味内容の分かる区切りでフレーズをつくり、類似したフレーズからカテゴリー化をし、分析を行った。これらの過程においては、特別支援教育を専門とする大学教員1名との協議を行い分析の妥当性を高めた。

3. 結果

本研究で得られたデータを分析した結果、障害そのものへの気づきや、障害者スポーツの特徴への気づき、体験者と比較しての障害者への気づき等が挙げられた。これらの内容をもとに、今後の障害者スポーツ体験や障害者との交流体験プログラムの効果的な実施と、障害理解の深まりについて考察した。

謝辞

本研究は、長野県障がい者スポーツ協会 平成28年度障がい者スポーツ普及振興事業の助成を受けたものです。

費目	請求/受入日	件名	内容	業者名	数量	金額(税込)	納品日	支払日	備考
1.人件費・謝金	2017/01/01	一般講演謝金 11/19実施	一般講演謝金 11月分 実施者:箱山愛香	栗田病院 倉石 和明	1回	30,000		2017/01/31	
1.人件費・謝金	2016/12/16	車椅子バスケット講演(一般講演謝金) 12/16実施	一般講演謝金 12月分 実施者:奥原明男	アート・オックス 奥原 明男	1回	30,000		2017/01/24	
1.人件費・謝金	2016/12/28	非常勤人件費振替(H28年12月支給給与)	障がい者シンクロナイズドスイミング体験会ほか事業活動の補助	鶴持 楓 5h/小林 絹子 10h/塚田 悠希 5h/深井 佐也 香 5h/堀内 彩希 5h/宮澤 圭奈 5h/茂手木 香衣 5h	40時間	36,000		2016/12/16	
1.人件費・謝金	2017/01/31	非常勤人件費振替(H29年1月支給給与)	障がい者シンクロナイズドスイミング体験会ほか事業活動の補助	野村 歩 5h/小林 琴英 5h	10時間	9,000		2017/01/17	
1.人件費・謝金	2017/02/28	非常勤人件費振替(H29年2月支給給与)	障がい者シンクロナイズドスイミング体験会ほか事業活動の補助	野村 歩 4h/小林 琴英 4h	8時間	7,200		2017/02/17	
1.人件費・謝金	2017/03/31	非常勤人件費振替(H29年3月支給給与)	障がい者シンクロナイズドスイミング体験会ほか事業活動の補助	野村 歩 5h/小林 琴英 5h/山近 真里子 12h	22時間	19,800		2017/03/17	
2.旅費	2017/01/01	長野県松本盲学校 12/08	松本盲学校での体験交流会(附属松本中2年生および教育学部学生)の実施	小島 哲也		5,750		2017/02/22	
2.旅費	2017/01/01	信大松本キャンパス 12/16	車イスバスケットボール講演(奥山氏)・体験会の実施	小島 哲也		6,000		2017/02/22	
2.旅費	2017/01/28	朝日新聞社マリン11F 01/24	朝日新聞主催第2回障がい者スポーツ公開シンポジウム(13:30-16:00)出席	小島 哲也		18,200		2017/02/22	
3.消耗品費	2016/10/17	インクカートリッジ	キヤノン BC340XL(340)	(株)ヤマダ電機 長野SBC通り営業所	2個	4,400	2016/10/17	2016/11/30	
3.消耗品費	2016/10/17	インクカートリッジ	キヤノン BC341XL(341)	(株)ヤマダ電機 長野SBC通り営業所	2個	4,760	2016/10/17	2016/11/30	
3.消耗品費	2017/01/10	ポスター(データ入稿)	障がい者スポーツポスター A2版多色刷	(有)ヤハタ	20個	20,520	2017/01/10	2017/02/28	
3.消耗品費	2017/01/11	プリンタインクカートリッジ	キヤノン BC341XL (340)	(株)ヤマダ電機 長野SBC通り営業所	1箱	2,290	2017/01/11	2017/02/28	
3.消耗品費	2017/01/16	郵便切手	日本郵政 120円切手	信州大学生生活協同組合	19枚	2,280	2017/01/16	2017/02/28	
3.消耗品費	2017/01/24	バスケットボール	モルテン BGR5-BO	(株)中屋スポーツ	2個	3,800	2017/01/24	2017/02/28	
計						200,000			

上記のとおり支払したことを証明します
平成29年3月24日

国立大学法人信州大学教育学部
会計係長 大山 繁

